

音読教材 新美南吉「赤とんぼ」

赤とんぼは、三回ほど空をまわって、いつも休む一本の垣根の竹の上に、チヨイととまりました。

山里の昼は静かです。

そして、初夏の山里は、真実まことに緑みどりにつつまれています。

赤とんぼは、クルリと眼玉まなこを転ころじました。

赤とんぼの休やすんでいる竹たけには、鞆たもとのつるがまきついています。昨年さねの夏なつ、この別荘べっしょうの主人しゅじんが植うえていった朝顔あさがおの結むすんだ実みが、また生はえたんだろう——と

赤とんぼは思おもいました。

今いまはこの家いえには誰だれもいないので、雨戸あまどが淋しみしくしまっています。

赤とんぼは、ツイと竹たけの先さきからからだを離はなして、高たかい空そらに舞まい上がりました。

三四人さんよにんの人が、こつちへやって来きます。

赤とんぼは、さっきの竹たけにまたとまって、じつと近ちかづいて来くる人々ひとびとを見みていました。

一番最初いちばんさいしよにかけて来きたのは、赤あかいリボンの幟しほ子こをかぶったかあいのおじょうちゃんでした。それから、おじょうちゃんのお母かあさん、荷物ものをドツサリ持もった

書生さん——と、こう三人です。

赤とんぼは、かあいとおじょうちゃんの赤いリボンにとまってみたくなりました。

でも、おじょうちゃんが怒るとこわいな——と、赤とんぼは頭をかたげました。

けど、とうとう、おじょうちゃんが前へ来たとき、赤とんぼは、おじょうちゃんの赤いリボンに飛びうつりました。

「あッ、おじょうさん、帽子に赤とんぼがとまりましたよ。」と、書生さんがさげびました。

赤とんぼは、今におじょうちゃんの手が、自分をつかまえに来やしないかと思つて、すぐ飛ぶ用意をしました。

しかし、おじょうちゃんは、赤とんぼをつかまえようともせず、

「まア、あたしの帽子に！　うれしいわ！」といつて、うれしさに跳び上がりました。

つばくらが、風のようにかけて行きます。

かあいとおじょうちゃんは、今まで空家だったその家に住みこみました。もちろん、お母さんや書生さんもいっしょです。

赤とんぼは、今日も空をまわっています。

夕陽が、その羽をいつそう赤くしています。

「とんぼとんぼ

赤とんぼ

すすきの中は

あぶないよ」

あどけない声で、こんな歌をうたっているのが、聞こえて来ました。

赤とんぼは、あのおじょうちゃんだろうと思つて、そのまま、声のする方へ飛んで行きました。

思つた通り、うたつてるのは、あのおじょうちゃんでした。

おじょうちゃんは、庭で行水をしながら、一人うたつてたのです。

赤とんぼが、頭の上へ来ると、おじょうちゃんは、持ってたおもちやの金魚をにぎつたまま、

「あたしの赤とんぼ！」とさげんで、両手を高くさし上げました。

赤とんぼは、とても愉快です。

晝生さんが、シャボンを持ってやって来ました。

「おじょうさん、背中を洗いまししょうか？」

「いや——」

「だって——」

「いや！ いや！ お母さんでなくっちゃ——」

「困ったおじょうさん。」

書生さんは、頭をかきながら歩き出しましたが、朝顔の葉にとまって、ふたりの話をきいている赤とんぼを見つけると、右手を大きくグルーッと一回まわしました。

妙な事をするな——と思つて、赤とんぼはその指先を見ていました。

つづけて、グルグルと書生さんは右手をまわします。そして、だんだん、その円を小さくして赤とんぼに近づいて来ます。

赤とんぼは、大きな眼をギョロギョロ動かして、書生さんの指先をみつめています。

だんだん、円は小さく近く、そして早くまわつて来ます。

赤とんぼは、眼まいをしてしまいました。

つぎの瞬間、赤とんぼは、書生さんの大きな指にはさまれていました。

「おじょうさん、赤とんぼをつかまえましたよ。あげましょうか？」

「ばか！ あたしの赤とんぼをつかまえたりなんかして——山田のばか！」

おじょうちゃんは、口をとがらして、湯を書生さんにぶっかけました。

書生さんは、赤とんぼをはなして逃げて行きました。

赤とんぼは、ホツとして空へ飛び上がりました。良いおじょうちゃんだな、

と思ひながら——

空は真青に晴れています。どこまでも澄んでいます。

赤とんぼは、窓に羽を休めて、書生さんのお話はなしに耳みみをかたむけています、か
あいいおじようちゃんと同じように。

「それからね、そのとんぼは、怒おこって大蜘蛛おほのやつにくいかかりました。くい
つかれた大蜘蛛おほは、痛い！ 痛い！ 助たすけてくれってね、大おお声こゑにさけんだので
すよ。すると、出でて来きたわ、出でて来きたわ、小ちいさな蜘蛛おほが、雲くものように出でて来き
ました。けれども、とんぼは、もともと強つよいんですから、片端かたはから蜘蛛おほにくいっ
いて、とうとう一匹ひき残のこらず縊おどしてしまいました。ホツとしてそのとんぼが、自分じぶん
の姿すがたを見ると、これはまあどうでしょう、蜘蛛おほの血ちが、まっかについてるじゃ
ありませんか。さあ大たい変へんだって、とんぼは、泉いずみへ飛とんで行いって、からだを洗すすい
ました。が、赤あかい血ちはちつともとれません。で、神かみ様さまにお願ねがいしてみると、お前まえ
は、罪なの無ない蜘蛛おほをたくさん縊おどしたから、そのたたりでそんなになったんだと、
叱おこられてしまいました。そのとんぼが今いまの赤あかとんぼなんですよ。だから、赤あかと
んぼは良よくないとんぼです。」

書生しよせいさんのお話はなしは終おわりました。

稔ねは、そんな醜みにくい事ことをしたおぼえはないがと、赤あかとんぼが、首くびをひねって考かんが
えましたとき、おじようちゃんが大おお声こゑでさげびました。

「嘘だ嘘だ！ 山田のお話は、みんな嘘だよ。あんなかあいらしい赤とんぼが、そんな醜い事をするなんて、蜘蛛の赤血だなんて——みんな嘘だよ。」

赤とんぼは、真実（まこと）にうれしく思いました。

例（れい）の書生（しよせい）さんは、顔をあかくして行ってしまいました。

窓（まど）から離（はな）れて、赤とんぼは、おじょうちゃんの肩（かた）につかまりました。

「まア！ あたしの赤とんぼ！ かあい赤とんぼ！」

おじょうちゃんの瞳（ひとみ）は、黒く澄（き）んでいました。

暑（あつ）かった夏（なつ）は、いつの間（ま）にかすぎさってしまいました。

鞆（たもと）顔（が）は、垣根（かきね）にまきついたまま、しおれました。

蟬（せみ）虫（むし）が、涼（すず）しい声（こゑ）でなくようになりました。

今日（きょう）も、赤とんぼは、おじょうちゃんに会い（あ）にやってきました。

赤とんぼは、ちよつとびつくりしました。それは、いつも開（ひら）いている窓（まど）が、皆（みな）しまっているからです。

どうしたのかしら？ と、赤とんぼが考（かん）えたとき、玄関（げんかん）から誰（たれ）か跳（は）び出して来ました。

おじょうちゃんです。あのかあいおじょうちゃんです。

けれども、今日（きょう）のおじょうちゃんは、悲（かな）しい顔（かお）つきでした。そして、この別荘（べつしょう）へはじめて来たときかぶってた、赤いリボンの幟（はた）子（こ）を着（き）け、きれいな服（き）を着（き）ていました。

赤とんぼはいつものように飛んで行って、おじょうちゃんの肩にとまりました。

「あたしの赤とんぼ……かあい赤とんぼ……あたし、東京へ帰るのよ、もうお別れよ。」

おじょうちゃんは、小さい細い声で泣くように言いました。

赤とんぼは悲しくなりました。自分もおじょうちゃんといっしょに東京へ行きたいなと思いました。

そのとき、おじょうちゃんのお母さんと、赤とんぼにいたずらをした書生さんが、出てまいりました。

「ではまいりましょう。」

皆、歩き出しました。

赤とんぼは、やがておじょうちゃんの肩を離れて、垣根の竹の先にうつりました。

「あたしの赤とんぼよ、さようなら——」

かあいおじょうちゃんは、なんべんもふりかえっていいました。

けど、とうとう、皆の姿は見えなくなってしまったのです。

もう、これからは、この家は空家になるのかな——赤とんぼは、しずかに首をかたむけました。

淋しい秋の夕方など、赤とんぼは、尾花の穂先にとまって、あのかあいお
じょうちゃんを思い出しています。